

Title	河上肇の「政治学講義」ノートについて
Author(s)	高橋, 俊哉
Citation	静脩 (1973), 10(1): 1-2
Issue Date	1973-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/36714
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

河上肇の「政治学講義」ノートについて

高 橋 俊 哉

河上文庫の全体的な内容については、さきにこの紙面をおかりしてご紹介したことがある。ノートや切抜きなどをのぞいて、書籍類の整理をすべておえた現在、文庫の個々の内容についてご報告したいこともあるのだが、ここでは河上博士の著述と考えられる一冊のノートについて書いて責をふせぎたい。

問題のノートはハツ折版の大学ノート約800ページ分を一冊に製本したもので——したがってその外観はノートというよりは一冊の著作そのものである——黒のクロスを用い、背表紙に「政治学講義 従明治42年9月至明治44年5月」の活字が金箔で押されている。明治44の数字が削り落とされているように見えるのは、あとでふれるように43の誤りのためであろう。本文は黒インクを用いたペン字の横書きである。（筆跡が河上のものであることは、ほぼ間違いない）河上博士の多くのノートに見られるように右側のページにだけ文章がつづられ、左ページを空白のまま残しているのは、後日の加筆・補註に便ならしめようとしたためと推測される。欄外の加筆はかなり多く（一部製本のさいカットされているが、判読が不可能というほどではない）、右ページの本文の大半が大きな訂正を加えられて、左ページに書き移されていることもしばしばである。ページ付けの数字は4つの章ごとにべつべつに与えられているのだが、これを合計すると約320ページになる。なお、章と章とのあいだには、20ページから30ページほどの空白のページがそれぞれ置かれている。ノート本文の構成を紹介しよう——

第1章 政治学ノ本質 (84ページ)

第2章 国家ノ分類 (95ページ)

第3章 政治思想ノ変遷 (上) (119ページ)

第4章 政治思想ノ変遷 (下)

第1節 無政府主義 (55ページ)

このノートが河上肇の著述であろうと推測するのは、第2章「国家ノ分類」の6ページ目に「国家ノ最モ幼稚ナル形態」としての氏族国家および氏族の最小単位としての家族に言及しながら、「普通行ハレテ居ル説ニ依ルト、最モ幼稚ナル時代ノ人類ハ、男女ノ間ニハ結婚ト云フ如キ一定ノ関係ハ成立シテ居ラナカッタノデアッテ、即チ、凡テ Promiskuität (乱

婚)ノ状態ヲ呈シ、從テ家族ト云フ 團結サヘ 作ッテ 居ナカッタノデアル、ト云フノデアルガ、此ノ事ノ誤謬デアルト云フ事ハ、余ガ『人類原始ノ生活』中ニ 詳論シテ 置イタ 処デアル」と述べている一節があることによる。この『人類原始ノ生活』とは、明治42年5月有斐閣より京都法学会「法律学経済学研究叢書 第2冊」として刊行されたものをさすのであろう。「人類原始ノ生活」の下篇(82—141ページ)は第5章「人類原始ノ社会団体」、第6章「人類原始ノ男女関係」の2章からなるのだが、両章とも上記のテーマ(原始人類の結婚——家族テーマ)を展開したものであって、ノートの記事と内容的に完全に合致する。では、なぜ河上博士はこの時期に、量的にもかなり 尨大なこのようなノートを作成したのであろうか。河上博士はすでに明治41年9月法科大学講師を委嘱されて、東京から京都へ移住している。42年5月、「人類原始…」出版、同7月助教授に任ぜられる。ところで、「京都法学会雑誌」は第5巻第8号(43年8月発行)において43年6月実施された学年末試験の記事をかけた、河上助教授担当の「政治学」の試験問題を次のように報じている——

1. 政治現象ノ本質
2. 政治ト宗教ト経済トノ関係
3. 無政府主義ノ意義及ヒ之カ取締

この試験問題と「政治学講義」ノートの内容を対比していくと、試験問題の第1問は「ノート」の第1章に、第2問は第2章の前半(ここで河上は国家を1)氏族的国家、2)宗教的国家、3)経済的国家に分けて詳述している。なお、この章の後半は君主国家、専制国家等をあつかう)に、そして第3問は第4章にそれぞれ対応・符合していることがわかる。(試みに次年度にあたる明治43年の試験問題を調べてみると、政治学は外国留学からもどった井上教授(井上の留学は42年6月から43年6月までであった)が出題しており、河上博士は経済史の担当に変わっている)。これらのことによって、河上博士が京大赴任1年後の明治42年9月から、43年5月までの間、法科大学で政治学を講じたこと、および、問題の「政治学講義」ノートがその際使用されたものであることは、ほぼ間違いないと思われる。

河上博士は京大赴任の前後のことがらを、いくつかの短文(とくに「思い出・断片」)のなかの「教師としての自画像」、「大死一番」など)に書き残しているが、このノートの執筆の理由や経緯については全くふれるところがない。教官の新任、担当講座の変更、留学などをつたえる京都法学会雑誌の「雑報」欄、その他からも、この間の事情はうかがえない(理由らしいものは推測できるけれども)。しかし、重要なことはノート執筆の経緯などよりは、この著述が河上肇の尨大な著作の中で、どのような位置をしめるか、であろう。このようなことは、もとより専門の識者の判定にまつべきことであろうが、そのための手がかりのようなものは提供できるのではなからうか。例えば、「ノート」の冒頭において、小野塚喜平次の政治学大綱ほか8点の文献を機械的に列挙した後、次のような説明を加えているところがそれがそれである。

「本講義ハ原書ヲ読ム代リニ 仮リニ 講義体ニシタルノミニテ、余ノ創案ニナルモノ少シ」。

(経済学部図書室)